

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2010 年 5 月 7 日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏 名（グループ名）	鈴木雅子（北限のジュゴンを見守る会）
連絡先・所属など	北限のジュゴンを見守る会 Tel / Fax: 0980-43-7027 携帯：090-8032 - 2564 〒905-0011 沖縄県名護市宮里 4 - 12 - 8 E-mail: n-hokugen.19@kjd.biglobe.ne.jp
調査研究・研修のテーマ	草の根市民による沖縄のジュゴン保護活動の構築

2. 調査研究・研修結果の概要

世界の分布の中で最も北に生息する沖縄のジュゴンはその数わずか数十頭と言われ、国の天然記念物としてまた絶滅危惧種として厳正に保護されなければならないが、米軍再編に関わる日米安保体制の中で、その最も重要な生息地に新たな米軍基地の建設という脅威に曝されている。この沖縄のジュゴンの保護のためには、再発見されてからすでに 10 年以上かけても有効な保護策の打てない国に任せるのではなく、地元市民が主体となって保護策を講じなければ近い将来絶滅するのは明らかである。

当会は地元ジュゴンの生息環境調査チームを組織し、市民自らが担って行くジュゴン保護の方策を、現存するジュゴンの餌場における食痕調査を軸に、歴史・文化の側面からの調査や海外事例を参考に、沖縄におけるジュゴンの具体的な保護計画の作成をめざしている。国内外の専門家の協力の元に、現地で実行可能な調査手法を模索することにより、希少なジュゴンの保護及び、生息環境の保全にむけ以下の項目にそって調査・研究をすすめた。

加えて、恒常的な市民による保護の地盤を作っていくための啓発活動として、一般向け食み跡観察会や学習会を開催した。

- 1) ジュゴンの生息環境を明らかにするためのジュゴンの食み跡モニタリング調査の継続。
- 2) 保護活動の先行事例と地域文化について聞き取り、文献調査。
- 3) ジュゴンの保護を具体化するために専門家からの助言を受けて中長期計画の作成。
- 4) 持続的な調査への協力を得、また有効な保護方策の受容を可能にするために必要な地域住民への啓発活動（一般向けの食み跡観察、陸上学習会、講演会）。

3. 調査研究・研修の経過

2009 年

- 4 月 18 ~ 19 日 春期 1 食み跡調査 > 辺野古 (調査練習 > 嘉陽)
- 27 日 アセス学習会 「 こんなアセスで沖縄のジュゴンを守れるの ?
ジュゴン保護、ここがポイント意見書の書き方、考え方」
- 5 月 21 ~ 24 日 IMCC(国際海洋保全会議 in ワシントン)に参加
< 沖縄のジュゴンの現状をアピール >
- 24 日 一般向け観察会 「 沖縄のジュゴンを知ろう!!!!!!」開催
- 6 月 5 日 ミニシンポ「 辺野古アセス準備書の問題と課題 科学的な視点から」
(日本自然保護協会・北限のジュゴン調査チームザン・じゅごんの里 共催)
- 6 日 「 大浦湾 市民モニタリング調査のススメ」研修会
(日本自然保護協会との共催)
- 6 ~ 7 日 水質調査 (辺野古テント有志、日本自然保護協会と合同)
- 12 ~ 13 日 水質調査 (SS > 浮遊物質質量測定)
- 24 日 環境保全論事前学習会
- 25 日 調査練習
- 26 ~ 27 日 春期 2 食み跡調査 > 嘉陽
- 28 日 ミニ・ワークショップ「 沖縄のジュゴン保護ー私たちのめざす市民調査」
- 7 月 5 日 観察会・学習会 「 大浦川の汽水藻、淡水藻を観察しよう!」
・ 調査検討ミーティング
- 12 日 環境教育講座「 カーミージーの海に学ぶ ~ 港川自治会と小学校を中心に ~ 」
- 26 日 高木基金成果報告会
- 8 月 ~ 歴史・文化調査文献調査
沖縄島周辺地域集中ヒヤリング
- 9 月 17 日 一般市民向け「 ジュゴンの生きる海辺の観察会」
- 10 月 25 日 秋期 1 食み跡調査 > 嘉陽
- 11 月 21 日 事前学習
- 22, 23 日 秋期 2 食み跡調査 > 嘉陽
- 12 月 5 日 東京講演会「 ニホンカワウソの絶滅に学ぶ、沖縄のジュゴンを絶滅させない方法」
- 12 ~ 13 日 秋期調査 3 (補足) > 辺野古

2010 年

- 1 月 10 日 陸上学習会 (基地問題)
「 岩国に吹いた風」 - 岩国の経験を通して名護市民に伝えたいこと
- 3 月 13 日 ジュゴン・フォーラム (調査メンバーを中心に専門家からのアドバイス)

4. 調査研究・研修の成果

・極めて生息数の少ないジュゴンの生活史の解明は困難を極めるが、彼らの生息環境の保全策を講じるには、日常的に利用する餌場のモニタリング調査により科学的に活用できるデータ採集が必須である。すでに 2006 年以後の試行錯誤の末に、地元市民による沖縄のジュゴンに適した調査の手法はほぼ確立し、今後は研究者の助言を得つつ蓄積されたデータを最大限活かした保護策のへ中長期的計画の作成に入る。その中で、歴史・文化調査を複合的に組み合わせ、過去と現在の事例から導き出せる自然環境と歴史・文化の密接な関係性の中で、地域住民や漁業者との情報交換や交流を通して海洋文化の豊かさの指標としてジュゴンの生きる海の多様性を証明することができた。そのことは、取りも直さず疲弊した沖縄の基地経済に依存した地方行政からの脱却の処方箋として活用されることが期待されている。

・具体的にはジュゴンの生息海域への米軍飛行場建設のための形骸化した環境アセスメントに対し、国際的な情報や専門的な視野から、また一般市民に向けての情報発信をして厳しい検証を加え、アセス審査会の意見形成に資することができ、ジュゴン保護の世論を広く構築することができた。また、ジュゴン保護や沖縄の自然環境を保全するために必要な知識の普及や各種調査の着手につとめ、多くの市民、県民の意識の向上と参加をうながすことができた。多様な学習活動は一般に流布されるジュゴン保護運動が「基地問題」としての側面だけでなく、市民自らの生活や日常的な意識においての「環境問題」であることが市民社会の中でよく理解されるようになり、保護活動の参加主体の多様性にもつながっている。

5. 対外的な発表実績

- 4月10日 沖縄防衛局に
「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価準備書縦覧への要望」を提出。
 - 13日 沖縄タイムス論壇にアセス批判寄稿
 - 5月8日 「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価準備書」に対する意見提出
(北限のジュゴン調査チーム・ザン)
 - 10日 同意見書提出(北限のジュゴンを見守る会)
 - 7月10日 「普天間」代替基地アセス公聴会の開催要請書提出
 - 8月11日 沖縄県環境影響評価審査会における「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価準備書」について専門家の意見聴取の要望書提出
 - 11日 海上自衛隊沖縄基地隊にジュゴン生息海域における不発弾海中爆破処理についての再要望書
 - 11月5日 フジテレビ「めざましテレビ」にジュゴンと食み跡の画像提供
 - 8日 米国大統領オバマへの要請文
 - 27日 UNEP(国連環境計画)ヘレポート提出
(米軍の沖縄における軍事活動による「北限のジュゴン」の生息環境のダメージおよび、新たな普天間代替施設建設によって予想される沖縄のジュゴンの地域個体群の絶滅への脅威に対する地域コミュニティによる環境保全活動)
 - 12月2日 内閣へ「普天間基地(飛行場)の即時閉鎖・返還(撤去)とジュゴンの生息するキャンプ・シュワブ沿岸域での新基地建設計画の撤回を求める声明」提出
 - 27日 琉球新報論壇に名護市の環境政策を問う寄稿
- 2010年
- 1月3日 沖縄環境マニフェスト市民の会にて名護市長選候補者への環境アンケート実施
地元メディア発表
 - 2月15日 環境省総合環境政策局環境影響評価課へ
「環境影響評価制度専門委員会報告(案)に対する意見」提出

6. 今後の展望

地域に適した調査の手法はほぼ確定できたので、継続的なモニタリング調査によりデータの採集の精度を上げ、科学的な解析を通じて、ジュゴン保護ロードマップの基礎資料として活用したい。

国際的なジュゴン保護を求める世論や環境保護の気運にも係わらず、日米政府は相変わらず米軍飛行場の建設地をジュゴンの生息地に移設することをあきらめていない。このような時代錯誤と地元住民の意思に反した政府の動向に、多くの市民運動や国際的な海生哺乳類保護のネットワークと連携し、現存するジュゴンからの知見という科学的バックグラウンドを持ってジュゴンの生息地への米軍飛行場の建設計画を断念させ、国に対し、早急に具体的な保護策を強く要求したい。

基地経済に頼らず、自立経済を掲げる地元行政との協働により地域の財産としてのジュゴンとその生息環境の保全をしっかりと位置づけ、より多くの市民参画と普及啓発に努めたい。

高木基金へのご意見

若い人たちに高木基金に親しみ、その意義に触れて、市民科学者として育ってもらいたいので、報告会やプレゼンへの参加を促進していますが、そのための費用が高みます。自費で参加してもらったり、会で負担したりなど色々と努力しています。できれば参加枠の補助、または一度沖縄での報告会などを企画して頂ければ・・・と思います。